642

特 251
175

天善教教歌

始

特251
175

天善教教歌

天善教祖の　善開師　永き苦心を致してぞ　此の世で　惱める　其の人を　救はんものと　思ひだし　天善教と申される　教義教典現はして　本部本山開きてぞ　善男善女集めまし　敬神崇祖を　導きて　忠孝　仁義　禮智　信愛の道を説きまする　天善教會本部には　天善王大神と　教祖の　祖先より　傳はりし　大六天大神と　八百萬の神様を　御祭り　神信致す　教へなり　さればこそ　御利益必らず　現はれ　眞の神信致しなば　惡邪來らず　其の前に　除ける心が　あるならば　神の道なる　天善の　教へを守りて　神信致すべし　御國の爲や　人の爲　己れの爲に　なることを　教へて共に　神信致して　此の世を　渡るなり　渡らば守れよ　御神信　神

(1)

信致す　其の時は　天神地祇皇神様を　御祭り　萬の神を　神仰し　これが眞の

神の道　善開師　これを悟りて　門人信者を　造りてぞ　毎日　神信　教へを致し
居る　扨て皆様よ　大日本國は神の國　人皆　神の子孫なり　これを悟れよ　人は皆
必らず神信　致すべし　神信致す　御儀式　天神　地祇　皇大神を　御祭り　家内
の　人は皆揃ひ　神信教文　唱へなば　萬の　神が　集りて　神願利益を　現はせり
これを悟りて　善開師　毎日神願　致すなり　御祭り致した　神様は　天地神人萬物
と　此の世　開きし神様と　大日本國の御祖神　天之御中主神　高皇產靈神　神皇產
靈神　天之常立神　國常立神　天照大御神様を　御祭り　天善王大神と　御祭り　致
して　拜みます　これぞ善開師の　教義なり　助け給へよ神様よ　拜みます　賴みま
す　何卒御利益下されよ　天善妙光六根清淨を　唱へてぞ　心を清め　身を清め　善
開師の　教道を　守りて神願　致すなり　天子様を敬ひ奉り　萬の神様を　敬ひて

毎日信仰　致します　御國の　御恩を忘れずに　家業を勤めて　神仰し　受けたる御
恩を忘れずに　御禮のほどを致します　御利益長く　續きませ　御國の御法に　從ひ
て　御國の爲に　働いて　忠義孝行の　人となり　人の惱みを　救ひます　仁の德を
下されよ　道の師祖や　業の師主に　受たる御義を　報ひます　必らず出世致させよ
人に交はる　禮儀正しく　致します　人に信用を　致させよ　人の爲なる　善き智惠
を　使はゞ人に　敬まはれ　神信教へ　天善の　善開師の　說教を　眞と信ずる　も
のならば　暗夜に燈火を持つ如く　身の災難は　除けられる　愛の心を　持ちまして
子供を愛して　育てなば　老年に　成つたる　時の　樂しみぞ　此の十善を今の世で
守りて　神願神仰　致されよ　神信心の　無き人は　病氣災難に　成り易し　御神様
に　不敬を致しなば　長き病で　苦しむぞ　心は　善くして　神信の　教へを　守る

べし　神信心の無き人は　御咎めありて　身を痛む　御神様に　不敬を　致しなば
長き病ひ　苦しめり　心の悪しき　其の人は　末に難事　致すなり　神信教へに　害
なさば　三世苦界に　落される　他人の職に　害なさば　末は鬼界に　苦しめり　詳
しく　知らずに　人眞似言ひば　家内に　災難招くなり　子孫が　善道を　守らねば
先祖は阿の世で　苦しむぞ　子孫は此の世で　救はれず　人は此の世で　善人と　成
りて此の世を　渡るべし　他人の悪口を言わずして　唯一心に　渡る人　これが眞の
善人ぞ　神信心の　ある人は　心を清めて善道の　教へを唱へて　神願致すべし毎日
善きこと　唱へなば　必らず幸福來るなり　これ善人と　申するは　家にも外にも　善
きことを　守りて此の世を　渡る人　物を買ふにも　交際も　善なる人より　買ふな
れば　縁起善くして　家繁昌　夫婦仲よく働ひて　毎日働く　家繁昌　夫は妻を　い

たわりて　暮さば家は　榮ひるぞ　妻は夫に　従ひて　何事致すが　妻の道　夫婦共
に善き道　渡りなば　親孝子が　生れ來て　老先苦勞は　更に無し　必らず營業　盛
んなり　兄弟仲善く　渡りなば　共に出世を致すなり　人の出世と　申するは　生活
安心致す者　天地の道は　廣ければ　心は大きく　渡るべし　少さき心は　間違ふぞ
違ひし道は　善はなし　進むにしたがひ　暗くなり　迷つて道を　失ふぞ　思わず知
らず　悪心に　變りて悪事を　致すなよ　悪慾心を　打ち捨て　誠の道を渡りなば
此の世に苦勞は更になし　人は善道を　渡られて　毎日信仰　致すべし　一度　助け
給わらば我れ一代は　信仰し　家内揃ふて　拜みます　神願致した　御利益は　己れ
と我が家に　ある罪を　祓ひ清めて　御神様が　座し給ふ　眞の神信　致すには　天
善行者を　頼まれよ　如何なる　罪處も　祓ふなり　知らざることは　聞くべきぞ

善開師の　教道は　總て善きこと教ひるぞ　早く來られ　悟すぞや　誠の道を渡らねば　身を縛りしめて　病痛むなり　必らず慾を　つゝしめば　此の世に　苦勞な事はなし　末に樂しく　暮すには　今働きの種を蒔け　蒔たる種は　生ひるぞや　成る實は樂し實と申すなり　これを悟りし　其の人は　如何程　苦心を　致すとも　末の氣樂を　築く者　それ善開師の　教へには　行つたる　道は歸るなり　行くも歸るも來た道も　誠の神の　教へなり　行くも歸るも　來た道も　渡るは此の世の　勤めなり　惡き心の　ある人は　重き荷物を　脊に負ひて　行き來の道に　難儀する　これが此の世で　病痛むこと　救ひ給ひよ　善師様よ　惡邪來たらず　其の前に　渡りますぞひ　神の道　神信致して　善の道　渡りますぞや　神様よ　善妙の光りに　照されよ　身は健善に　致されよ　働く仕事は　榮ひられ　心樂しく　世を渡り　壽命は

長く　國の爲　これぞ人一代の　修めなり　それ神仰の　始まりは　心體清めて　神様に　萬の物を　御供ひて　神願教文　唱ふ時　心は上者を　敬ひて　下の者をば愛されて　人には交り　善く致し　不敬の行ひ　更に無く　これが眞の　神仰ぞ　師徒の　交り　善くなさば　神願利益　現われる　世の人　仲善く　交われば　共に樂しく　身を修め　神の道なる善道は　萬の人を太助くなり　此の世の中は多き道　己れが行ふ　道を渡るべし　惡き道は　無けれども　自から　心で造るなり　惡き道に　落ちる人　御神様の罰めぞ　神の御法に　咎められ　何處に　行くとも　難儀する　如何程惡しき　道に落るとも　改心すれば　除けるなり　これ善開師の　神願ぞ　善開日頃の教導は　御神様の　御使こ　なる修行　修めて　善妙　功德あらわれて　光りは　其の身の　譽れなり　大六道を　悟りて教ひを　廣めるに　根魂善ければ　誠人こ敬まわれ

清き心の　熱心で　永しひ迄の　門人と　成りて神信　致しなは　此の世　樂しく渡ら
れる　天善教祖の　善開師や　門人を　頼みて　神願説教　聞くなれば　罪咎崇りは　取
れるなり　信者となれよ　皆人よ　世生安心導びくぞ　これ善開師の　大願で　凡家内
の　災難も　四百四病の　病とて　皆な己が　心で造るなり　此の世に　有つて　見ひな
ひ　心を直すには　そも神願の　他に無し　大助給ひよ　御神様や　善師様に　願ひま
す　何卒　御利益　惠み給ひよ　願ひますぞや　拜みます　天善妙光六根清淨
夫れ天善教と　申される　教義教典　造られし　善開師の　生國は　大日本國は　常
陸なる　松風名所の　谷田部町　並木太郎の　松の下　昔し關所の　屋敷にて　父は
寺小屋　師匠を致しつゝ　易者を家業に　致されて　母は飴菓子商ひて　細き暮しの
其の中に　生れましたる　善開師　本名椎名顯一ぞ　天才なるか　善開は　幼き時よ

り　神信學問好みまし　年月廻るは　早きもの　早十五歳の　春中ば　立身出世を
致さんと　上州差して　養蠶教師の研究に　蠶地で名高き　島村ひ參りて　勉强致し
まし　高額の賞料　戴だひて　積る孝心　現われて　上州奥の　沼田在ひと進み行き
養蠶仕事を致してぞ　喜びまして　善開は　一日たりと　早く歸宅を　思ひ立ち　沼
田日光の山越ひに　二日三日は　人家はあれど　歩むに連れて　人家なく　道聞く人
にも　會われねば　奥山深く道は無し　淋しき山中さまよひて　進退此處に極まりし
其の時不思議が　二度三度　峯に登り山降り　晝尚暗き谷の淵　瀧の音をば友にして
岩をつたわり　谷を越ひ　草木の中を潜りてぞ　歩む足元驚かし　大鳥小鳥が飛び出
して　何ごたとひん淋しさぞ　持參の食事は　無くなりて足は疲れて　目に涙　救ひ
の神も　無かりしか　救ひの人にも　會われしか　私の父は神信の　道を教ひる　行

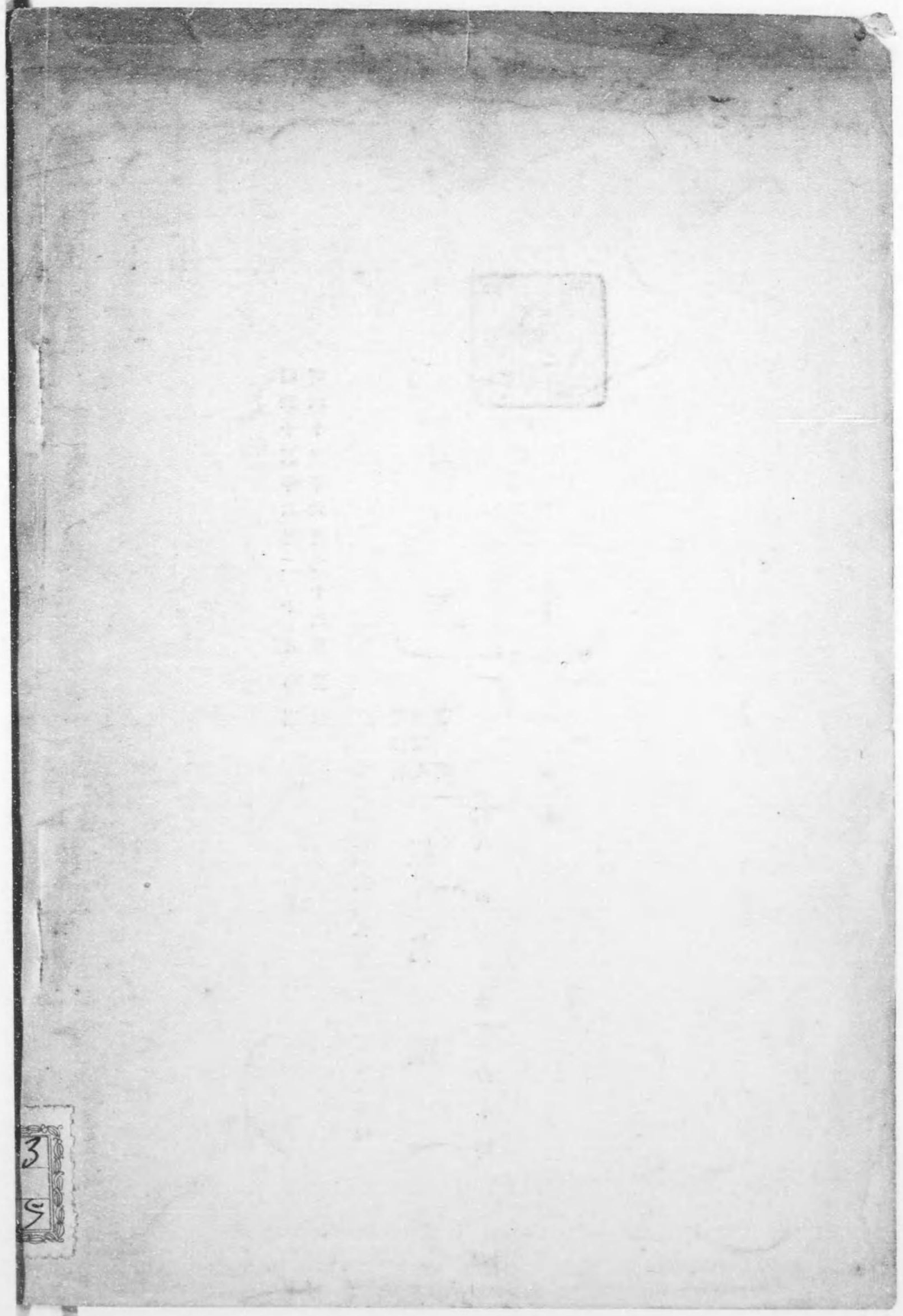
をして　子である我れに　此の難義　救ひ給ひよ神様よ　家神様よ先祖様　我れが歸
宅致しなば　必らず神信致してぞ　親にも孝行を　致します　御先祖様の　御名は此
の世に　必らず現わすぞ　太助給ひと　東に向ひ手を合せ　拜みましたる　其時は
日は西山に　眞の暗　岩の上に立ちまして　邊りの山を見巡はせば　不思議や前の岩
山の　屏風の如く立岩の　中ばに光る　燈し火ぞ　、　さて有難や神様か　仙人様か知
らねども　救ひの神の成せること　然れば救ひを願はんと　虫這ふ如く　登り行き
様子如何にと伺ひば　七十近くの老翁一人　圍呂火の前に　居られたり　繪にある仙
人の如くなり　善開救を賴みなば　笑面で向ふ信節さ　善開分心致してぞ　言われる
儘に　世話になり　諸の話しを　聽ひたり語つたり　其の面白さはたとひなし　昔語
りや武勇傳　學問技術の話しを致し　天地神人靈物の　道理は詳しく說き聽かせ　善

開漸々悟りなば　老翁は善開に向ひまし　これ小僧　お前人里離れし　此處に來て
此の爺に聞ひたれば　歸宅致して　里人に語れば　不思議と思われる　夫れが出世の
道となる　されど悟りし語を　十分に語りなば　已の難に掛るぞよ　早今日は旅の仕
度せよ　山路の時節來るぞひ　日光宿ひ出し申す　老翁善開語りつゝ　山峯越して谷
越して岩より岩ひつたわりて　歩み來たれば　向ふに見ひる阿の光り　阿れが日光湯
元宿　俺は此道左へ行くが　お前は此の道右へ行け　言われてお禮を申述べ　首を上
げれば　老翁は數間離れし岩の上　立たれまして善開に　早く行けよと言われまし
今夜の中に歸られる　東の方ひ歩み行け　足を早めて　日光町を通り過ぎ　宇都宮よ
り結城街道歸り來る　程なく我家ひ歸り來て　明て速様上京し　都の人氣悟らんと
繪書き易者で　夜店を張りて　持參の金が無くなれば　我が家ひ歸りて　養蠶仕事

百姓仕事や職人の　手傳致し　金を蓄め　斯様な事が五六度　年十八歳の其の時に
神信教書を　作り　年二十一歳に完成したる教書が　之れ天善教と申すなり　此の教
説を説きまして　門人信者を養成し　難行苦行を致しつゝ　數多門人信者が　出來ら
れて　東京荒川區　尾久町ひと　天善教本部を建てゝ共に下野　上都賀郡　小來川の
山中ひ　善龍山と名を附て　天善教本山を建てゝ登山　導けば　數多門人信者が　參
詣し　天善妙光六根清淨を　高らかに　唱ひ拜むぞ　有難や　昭和六年十二月二
十四日に　許されて　天善教を　布教する　神道天善教會本部となりました　これぞ
善開師の　永き苦心の功なるぞ　天善妙光六根清淨

昭和十三年六月二十日印刷
昭和十三年六月二十五日發行

東京市荒川區尾久町二丁目百廿六番地
發行兼印刷人
著者　椎名顯一

發行所　神道天善教會本部

終